

若書きは素晴らしき —池内紀『ウィーン／ある都市の物語』—

故・宮崎市定教授は幕末書家・貫名海屋を「若書きが良い」と評している。完成度・字配りよりも筆に勢い・色気があるからだそうだ*1。大碩学を真似ると、物書き(作家学者)も初期作品が圧倒的に素晴らしい。例えば漱石『坊ちゃん』傑作で面白い。谷崎も初期作品が鮮烈と思うが、如何に。(菊地実)

都市論の走り

本欄で紹介する書物は大学卒業年や二十代のころ読んだ本が多い。研究員商売になってからはメディアとビジネス関係が多く、読書の中身や目的が変わった。森銑三翁のように、繰り返し読んだ著者は稀である。

今回紹介する池内紀はカフカ翻訳者として知られる独文学者。東大を辞めた後は小説・俳句・エッセイストとして活躍されていたが、本書以外に読んだのは旅行記だけである。むしろ、ご兄弟の天体物理学者池内了さんの著書は数冊読んでいる。しかし『文学部という病』ではないが、仏文・独文の方々は幅広い創作、見方を変えると脇道に逸れていくのだろうか。

『ウィーン』は1973年に美術出版社から『ウィーン都市の美学』として出された。1989年に文庫化されたあとがきに「十六年前の私である、見るからに肩肘張っている…最初の本ということで意気こんでいる…都市論の走りになったと自負している」(271頁)。

<図表1>本書の目次

・夢想	・小娘	・キャバレー
・森	・ビーダーマイヤー	・小人
・女体	・プラーター	・零落
・遊び	・戦争	・ウィーン小辞典
・カフェ	・祖父たち	
・皇帝墳墓	・世紀末	
・雪	・埋葬	
・ペスト柱	・仮装	
・バロック	・オルガ叔母さん	



<ちくま文庫>

一ヶ月で一氣に書き上げただけに、現在の学者本のように小うるさい注釈がなく読みやすい。何度も読んだが、独断に満ちた内容と多面的なエピソードが散りばめられている点が魅力となっている。

ハプスブルグ家とウィーン

都市論というとアレクサンドリア、バグダット、コンスタンティノーブル、ローマ、バルセロナ、パリ、ロンドン、ベルリン、ニューヨーク、北京、上海、香港といった多くの都市論や都市背景とした文学・映画を堪能してきた。実際に訪れた都市も少なくない。ただし都市は時代によって大きく変貌する。わずか数日の滞在では知ることはほんの少しだ。

ウィーンは古代ローマ帝国の砦が異民族からの防衛

拠点となり、やがてオーストリア大公・ハプスブルグ家首都、十九世紀のオーストリア・ハンガリー二重帝国と発展していく。時代と共に王家や国境線が煩雑に変わるの、東海小島の住民にはいささか理解し難い。ウィーンといえばコーヒー、ウィーンフィル、ワルツ、ウィーン会議(『会議は踊る』)、クリムトに代表される退廃美学、フロイト精神病理学、第二次大戦後の占領下を描いた『第三の男』。人や時代によってイメージは多彩だ。音楽一つとっても、ハイドン・モーツァルト・シュトラウス・マーラーでは大差がある。

ウィーン女体論

「ウィーンは法皇や司教や將軍の町ではない。この町はローマの凱旋門やパリのエトワールやベルリンのリンデン通りを知らない。都市を縦に貫く直線を知らない…極めてバロック的都市でありながら、中心の軸を描いている…ウィーンを支配するのは、緩やかな塊であり、球形である。これは女体だ」(22頁)。都市構造や形成過程を見るのは都市論常道として、ウィーン＝女体論そしてバロック論は、通底として本書のモチーフとなっている。

面白いエピソードの連続

私はここで紹介されている詩人や演劇人をほとんど知らない。十九世紀大衆演劇人として人気を博したヨーハン・ネストロイをはじめ、戯曲家も詩人もほとんど初見。「オルガ叔母さん」はその好例で、短編小説を読んでいる感がある。「カフェ」では「ここでは時間が存在しない…昔の匂いがする…」(18頁)と文学的表現で両大戦間を往き来したカフェ文士でボヘミアンのアントン・クーを紹介している。なにせドイツ文学にもウィーン文士にくらい身としてはひたすら筆者が紹介するエピソードの面白さに浸るしかない。

一方著名人はどうだろうか。女帝マリア・テレジアのあと

を受けたヨーゼフ二世(1765-1790統治)を「みずからは自由思想家と称していたが…絶え間なく規則を定め、描いて、文書を回した」(59頁)と滑稽な啓蒙君主として規定している。あらゆる文書化と官僚制の硬直性はカフカ世界にも通底するテーマである(もっとも、これではプラハ論になってしまうが…)。

ウィーン会議と十九世紀前半を代表する外相・宰相メッテルニヒを「安定への偏愛は、つまるところも思考力の怠惰」(112頁)とビーダーマイヤー時代をやや軽蔑して論じている。この評価はいかがだろうか。タレイランやメッテルニヒは複雑怪奇で、文学者が独断する領域を超えているかもしれない。米キッシンジャーはウィーン体制を研究し、パワーポリティクスに応用していた。

バロック＝メヌエット

本書で一番記憶に残っているのは「バロック論」である。バロックといっても美術・建築・音楽や地域時代によって大きな差があるが、「バロック時代の舞踏形式はメヌエットだ」(82頁)とフリーデル『近代文化史』を引用して断定している*2。「厳格な秩序を強いて、機械さながらの動きを強制し…」というメヌエット論からバロック論に至り、さらにデカルト機械論やモリエールの形式的喜劇まで論じていく。この文章を肴に編集部仲間と神保町の酒場カフェで議論したことがつい昨日のように思い出される。さらに『ホビー白書』をまとめる際に再度人形論やフィギュアに触れて、このことがリフレインされた。

ある意味で独創的、独断に満ちた都市論だが該博な知識と情熱的な語り口が魅力的な内容となっている。

*1:『遊心譜』中央公論社1995年。もっともこれと正反対の説もある。

*2: エゴン・フリーデルは1938年、ヒトラーのウィーン進駐で自殺した文学者。本書の語り口は『近代文化史』にそっくり。

■ 著者/ 池内紀(いけうち おさむ)。兵庫県姫路市生まれ、1940-2019年。ドイツ文学者。エッセイスト。東京外語大・東大大学院修了、都立大助教授、東大文学部教授。カフカ全集をはじめ翻訳・著作多数。

■ 書誌/ 1973年『ウィーン都市の美学』美術出版社。文庫本は増補改訂版、1989年/ちくま文庫。